

北村 暁夫 著  
『イタリア史 10 講』

(岩波新書、2019年3月刊、286頁、900円)

濱 口 忠 大

地中海に長靴型に突き出て、背後にはアルプス山脈が聳えるイタリアは、豊かな歴史と文化によって我が国でも幅広い関心を集めてきた。だが、各々の分野や地域の強烈な個性に目が行くために、国の全体像が見えにくくなるきらいもあるかもしれない。その意味で近年相次いでイタリア史関係の入門書が刊行されていることは、歓迎すべきことである<sup>1)</sup>。そしてこの度、岩波新書の「10講」シリーズから、イタリア近現代史研究の第一人者である北村暁夫氏によって『イタリア史 10 講』が出版されたので、ここに紹介したい。

本書を一読すると、限られた紙幅の中で各時代の政治、経済、社会、文化をバランスよく叙述するだけでなく、重要な問題点についての著者の見解が随所で提示されていることに感心させられる。記述上の視点および特色として、北村氏自身が冒頭部と「あとがき」で挙げておられるのは、以下の点である。

- ①19世紀以降の占める比重がかなり大きい。
  - ②イタリアを構成するさまざまな地域の多様性に着目して歴史を見る。
  - ③ヨーロッパ・地中海世界の歴史の一部として、イタリアの歴史を見る。
- ①の点に関しては、本書の10講は古代史が1講、中世史が2講、近世史

---

1) 藤内哲也編『はじめて学ぶイタリアの歴史と文化』(ミネルヴァ書房、2016年)、土肥秀行、山手昌樹編『教養のイタリア近現代史』(ミネルヴァ書房、2017年)、高橋進、村上義和編『イタリアの歴史を知るための50章』(明石書店、2017年)など。

(ルネサンス～18世紀)が3講、近現代史が4講という構成になっており、確かに19世紀以降が全体の半分近くの頁数を占めている。但し近現代史の比重が大きいのは、既刊の10講シリーズ(ドイツ、フランス、イギリス史)や、多くのイタリア史の概説書にも共通して言えることである。

次に②についてであるが、イタリアではローマ帝国の崩壊から1861年の国家統一まで、常に複数の国家が存在してきた。その多様かつ複雑に入り組んだ歴史が隈なく描写されている。特に興味深かったのは、12～14世紀に北部で多くの都市国家が形成されたのに対して南部は一つの国家に収斂されたことを、ブローデルの「緩慢なリズムを持つ歴史」という概念と結びつけて、現代イタリアの南北の差異を直接的に説明するようなことは慎むべきだという指摘である(70-71頁)。

③の視点は、ローマ帝国崩壊後の中世前期を扱う第2講が「三つの世界の狭間で」と題されていることから端的に窺えるし(三つの世界とは、ゲルマン、ビザンツ、イスラム)、近世以降も外国支配から独立への過程、19世紀後半に始まる北アフリカ進出、現代のEUとの関係などを通して常に意識されている。だが、私がより強調したいのは、本書の近現代史を扱う部分が、ヨーロッパ・地中海世界という枠を超えたグローバルな視点で描かれていることである。例えば181頁のガリバルディの南北アメリカへの亡命とそれを支援した移民ネットワークの存在についての言及は、リソルジメント運動を国家統一よりも広い文脈において考える手がかりになる。イタリアからヨーロッパ、南北アメリカへの移民の目的と実態を示す211-213頁は、著者の長年にわたる移民史研究のエッセンスと言えよう。そして本書の末尾は、「昨今の移民・難民の流入も、イタリアの新たな多様化、多文化化への一つの過程なのである」と締めくくられる。10講シリーズで最初に出版された『ドイツ史10講』の「あとがき」で坂井榮八郎氏は、本シリーズの特色を「決して大きな概説書の縮刷版などではなく、むしろ著者それぞれの歴史の見方・捉え方が強くにじみ出た通史」になることだと述べられた。この点に照らせば、移民を通してグローバルな視点でイタリア史を描くことこそが、元々は「限定された時間の幅の中で

世界全体を対象として、異なる地域や集団の接触や交流を研究すること」を好んできた(284頁)北村氏の個性が最も発揮されているところだと言えるのではなからうか。

ただ、遠くまでを見渡そうとすると、他方で近くに目が行き届きにくくなる部分が出てくるかもしれない。例えば20世紀の隣国ユーゴスラヴィアとの領土問題について、本書の224頁には第一次世界大戦後イタリアはイストリア半島を「獲得することはできなかった」と書かれているが、同頁の地図では明示されているように、半島東部のフィウメ以外はイタリアが併合している。より大きな問題は、本書に限らずわが国のイタリア史概説の全般にかかわるが、近世以降の「外国人支配」の歴史的意義をどう考えるかということである。とりわけ北中部イタリアの多くを直接、間接的に支配したオーストリアについては、18世紀後半は啓蒙改革が注目されるのに対して、ウィーン体制期以降はイタリアの独立、統一への流れを主体に記述するために、専ら敵役のように描かれるきらいがある。だが、欧米の研究ではオーストリア支配の、特に行政面での効率性が再評価されている。本書の164-165頁に「ナポレオン支配がもたらしたもの」という節があるように、オーストリアや、南部のブルボン朝の統治に関しても、肯定的な側面を併せて考察されるべきではなからうか。「地域の多様性」を踏まえれば、国家統一を、サルデーニャ王国による併合とその後の中央集権化という流れとは違ったベクトルから見ることにも出来るはずである。

最後に、参考文献についても一言触れておきたい。本書では個々の歴史事象や論点が欧米の最新の研究成果を踏まえて記述されているだけでなく、文献表から端的に窺えるように、我が国におけるイタリア史研究の蓄積も随所に取り込まれている。これはご自身の国内外での優れた研究活動に加えて、共同研究プロジェクトの牽引や研究会の事務局の労も厭わずに、日本のイタリア史研究全体の発展に尽力してこられた北村氏ならではの強調したい。

本書は簡潔な概説書であるが、イタリアの歴史に関心を持つ様々な読者の疑問に的確に答えるだけでなく、これからイタリア史の研究を志す人に今後の方向性を考えてもらう出発点にもなるものである。